

御影堂扇子の起元

御影堂は 嵯峨天皇御后の御願にして天長年中の草創なり中古建久の頃接濟使大納言菅原の息女清原御玉織姫は無官大夫敦盛の裏方にて敦盛讃州一の谷におゐて戦死の徒刺殺して法尼となり富山に閉居して只嘗  
善徳をぞ崇まればけるしかるに 主上湖熱の御願ありて日をかまれば月を經るとも治學更に効驗なく上下悲歎に沈みけるなり法尼阿闍梨結實と共に胎儀を製造し清伏毒害除羅尼御呪を一落又持念して奉られける 主上是を聞き玉ふ  
に時に應じて御熱願に清冷の風に消除し速に平癒の功を奏しければ百官歡喜の扇を開き 歡感殊に創ならす當御影堂製造の扇子には 久壽扇の住名を賜り 嵯峨の御玉に准らへ水無月毎に當御影堂の製扇を几帳に掛置玉  
ひ三伏の熱扇を敬ひ玉ふを御嘉詞と成玉ひける是當御影堂製扇名譽の靈福なり其後正嘉年中天下疾風流行の時泰も 勅命ありて當御影堂製造の扇子を廻く病人に施し厄難惡氣を敬ひけるに効驗空しからす昔人立處に快氣を得  
たり夫より以來相傳へ應仁の頃迄は専ら御影堂守扇と稱して貴賤ひとしく嘉詞の年玉となし各家母に祝ひ納て危難消除を祈めること都鄙の風習とはなりけり加之家康公は當御影堂折の軍儀にて天下平定の實功を立てられ元和  
元年上洛のより更に末廣扇を献上せしめて家門の榮譽を祝し長に太平の德風を四海に播し玉ひしこと又當御影堂製扇奇持の嘉運とも謂べし、かゝる日出度例あれば慶應四年戊辰のきさらき  
聽上御親征行幸あらせられけるなり御陣扇献上し奉りぬること誠にこれ當御影堂製扇萬古不朽の名譽なること遠く世人の知る處をれば略して述ることかくの如し 既に製扇業頗有て以來許多見霜の間古來の芳譽を失はず製扇  
の業務に従事して今日に至るも繼續し其製品は古にことならず時世の運運にともなひ益々原料を精擇し製造尤も注意を加へ無價に調進仕り修繕くは四方江湖の諸君舊に倍し益々御愛顧あらんことを

久壽扇本舗 平安五條大橋畔 御影堂桑林菴 宣阿彌藏

